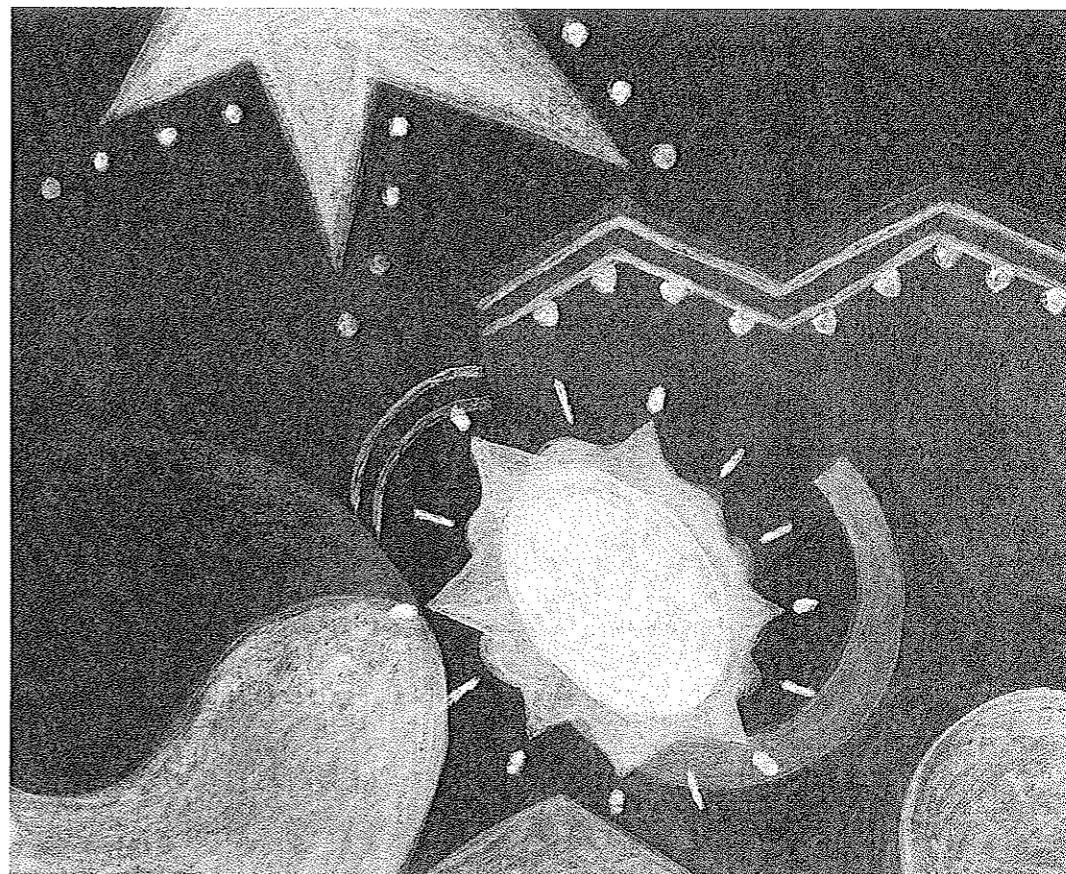


# 月刊学校教育相談

編集・学校教育相談研究所



特集①

保護者相談で発達に偏りのある子と家族を支援する

特集②

面談での勝負どころ



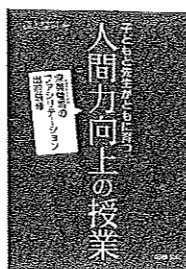
本誌の読者にはお馴染みの「木陰の物語」は、臨床心理家として多くの家族と接してきた団氏のライフワーク的な作品である。作品は一四年前から一か月に一作ずつ紡がれ、現在までに描かれた作品は一六〇作を超える。本誌

## 『家族の練習問題—木陰の物語5』 過去も、未来も、『』

団士郎／著  
ホンプロック 一三〇〇円＋税

では二〇一二年四月号から連載を開始し、新作をいち早くお届けしている。本書は、これまで描かれてきた「木陰の物語」の中からチョイスしてまとめられた作品集の第五巻で、一六作品が収録されている。加えて作家の辻村

深月氏、お笑い芸人の中田敦彦氏、映画監督の石井裕也氏が家族をテーマにエッセイを寄稿し、内容の濃い一冊となっている。  
団氏が描く作品は示唆に富み、家族や子育て、教育についての考えを深めてくれるだろう。また、三人のエッセイも印象深く心に残るだろう。  
学校の先生方はもちろん、子育てや家族関係に悩む保護者にもおすすしたい。手元に置いて何度でも読み返したくなる本である。



『子どもと先生がともに育つ』  
人間力向上の授業  
深美隆司／著  
図書文化 一八〇〇円＋税

「依存的なあり様から、主体的なあり様へ」——著者は、ビジネス書として世界的なベストセラーであるコヴィーの『7つの習慣』に触発されて、この概念を構築する。  
著者が勤務していた大阪府の松原第

七中学校は、文科省の研究開発発着学校の指定を受けていた。著者は研究主任として、人間関係づくりの授業の理論的整理や、不登校の子どもたちへの支援体制の構築に取り組み。その中で、先の概念は人間関係づくりの授業をさら

に高めていくうえで大きな意義をもったという。そして、いじめ・不登校という、多くの教師が後追い指導に終始し消耗する課題も、子どもたちを「主体的なあり様」へと支援することで予防できると確信する。  
読者は、この本を読み進める中で、教師自身こそ「主体的なあり様」でいることの大切さを痛感するだろう。著者の熱い思い、そして人間性向上の授業の具体的な方法論が、ぐいぐいと伝わってくる。